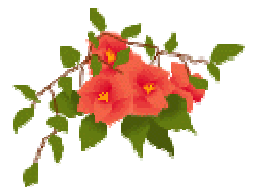


ヒルトップ上池台の花たち

このノートにはヒルトップ上池台の花壇に咲いている花の写真がファイルされています。そして花の属、科、来歴が書かれています
それぞれの花たちの写真と生い立ちを楽しんでいただければ幸いです



『紫陽花』ユキノシタ科 アジサイ属 [落葉低木] 6～7月
『アガパンサス』ユリ科 南アフリカ原産の多年草 6～7月



(紫陽花：左手前とアガパンサス：右奥)

撮影：2000年7月

『紫陽花』

花はすべて装飾花で実を結ばない。葉は対生し、長さ10～15cmの卵形または広卵形で、先は急にとがり、縁に鋸歯がある

『アガパンサス』

ムラサキクンシランの和名がある。花は青色、ときに白色で頂に10～50個の散状花穂をつける。葉は根生で細長く、長さ50～60cm以上に達し、質が熱い

『センニチコウ』アメリカ原産のヒユ科の一年草

『インパチエンス』ツリフネソウ科 インパチエンス属 4～11月



(センニチコウ：赤とインパチエンス：ピンク)

撮影：2000年7月

『センニチコウ』

花がしおれずに長い間残ることから『千日紅』『千日草』といわれる。葉は対生し、長楕円形で長さ4～10cm、柄のもとが節とともに赤味を帯びる。夏の切花とされ、乾燥花としても用いられる

『インパチエンス』

別名アフリカホウセンカ。アジアやアフリカの熱帯から亜熱帯の高山地帯が原産地。緋赤からピンクまでの豊富な花色をもつ一年草種で、日陰でもよく咲く。インパチエンスとは、ラテン語で、「忍耐できない」「短気」を表し、熟した種を瞬間的に弾き飛ばすところから、名付けられた

『ホウセンカ』夏の庭園に栽培されるツリフネソウ科の一年草



(ホウセンカ)

撮影：2003年8月

『ホウセンカ』

原産地はアジア南部のインドや中国南部。茎の高さは60cmに達し、肉質で太い。毛がなく下方の節がふくれて不定根を出す。上部の葉は互生し、披針形でへりにとがった細かいきょ歯がある。花は夏から秋にわたり葉腋に2～3個細い柄の先に横向きに咲く。花色は赤、桃、白、紫、黄など。八重咲きや斑入りもある。果実は紡鐘形で、長さ1.5～2cm。細毛があり、熟して5片に裂け、黄褐色の丸い種子を飛散させる。果実はわずかな刺激で種子をはじく。昔はホウセンカの花を爪紅(つまべに)として爪を染めるのに用いた

『チョウセンアサガオ』 熱帯アジア原産のナス科の一年草(有毒植物)



(チョウセンアサガオ)

撮影：2003年8月

『チョウセンアサガオ』

高さは1 m内外。多く枝を分け、葉は卵形。縁は浅く波状になり、長い柄で互生する。夏から秋にアサガオに似た漏斗状の花を開く。花冠は白色で筒部は長い。果実は球形で表面に短いとげがあり、白色の種子がある。この種子はスコポラミンを主成分とするアルカロイドを含み薬用に用いられる。他にキチガイナスビ、マンダラゲの名がある。チョウセンアサガオと似たものに、ヨウシュチョウセンアサガオがあるが、これは熱帯アメリカ原産で、花は淡紫色、果実は卵形で大小のとげが多く熟すると4片に裂開して、黒色の種子を出す。この葉はマンダラ葉といわれ薬用となる。ぜんそくタバコの原料となるが、毒性が強く使用には十分な注意が必要である

『トレニア』ベトナム原産のゴマノハグサ科の一年草 夏～秋



(トレニア)

撮影：2000年8月

『トレニア』

日本の雑草「ウリクサ」の仲間、ハナウリクサともいう。茎は千稜で、葉は卵形。花は頂生または腋生。我が国には明治初期に渡来している

『モモイロヒルザキツキミソウ』北アメリカ原産のアカバナ科の多年草



(モモイロヒルザキツキミソウ)

撮影：2000年8月

『モモイロヒルザキツキミソウ』

朝咲いて、夕方しぼむことから、このように呼ばれる。

《参考》ツキミソウ メキシコ原産のアカバナ科の越年草

4弁の白い花が夕方咲いて、翌朝しぼむ。我が国には、観賞植物として嘉永年間(1848 - 54)に渡来したが、現在ではほとんど見られなくなった。河原などに群生する黄色の大きな花が咲く、オオマツヨイグサを、普通ツキミソウと呼んでいる。花はすべて装飾花で実を結ばない。葉は対生し、長さ10～15cmの卵形または広卵形で、先は急にとがり、縁に鋸歯がある

『ハナトラノオ』北アメリカ原産のシソ科の多年草



(ハナトラノオ)

撮影：2000年9月

『ハナトラノオ』

賞用として輸入されたが、今では野生状になっているところもある。地下に根茎をひいて繁殖する。茎は方形で高さ30cm～100cmになる。葉は規則正しい十字対生をし、披針形で質が厚くへりに鋭いきょ歯がある。夏から秋に茎頂に穂状花序を出し、淡紅色のしん形花を密生する

『ヒナギク』ヨーロッパ原産のキク科の多年草



(ヒナギク)

撮影：2000年9月

『ヒナギク』

フランス語名でマーガレット。英語名でデージ。葉は根出葉。へら形で長い柄がある。この間から、10～15cmの花茎を出し、一頭花をつける。一重咲きのほかに、八重咲きもあり、春から秋まで長く咲く。和名はお雛様のひな菊の意味で、小さくて可愛らしい姿によったもの

『ヒガンバナ』ヒガンバナ科



(ヒガンバナ)

撮影：2000年10月

『ヒガンバナ』

秋の彼岸の頃、花茎のみを立て、頂に散形に赤色の花を数個つける鱗茎植物。花茎は高さ30～50cmで、葉はない。葉は、秋末に濃緑色の細長く、厚みのあるリボン状のものをつけ、越冬し、初夏に枯れる。秋の彼岸頃に花が咲くので、この名がある。このほか、マンジュシャゲ、ユウレイバナ、シビトバナ、テンガイバナ、ステゴバナなど、地方により多くの呼び名がある(有毒植物)

『タマスダレ』南アメリカ原産のヒガンバナ科の球根植物



(タマスダレ)

撮影：2000年10月

『タマスダレ』

明治初年に日本に渡来し、観賞用として路地で栽培された。葉間から30cmくらいの花茎を生じ、包葉に抱かれた白色の上向きの花を単生する。花被片6個は同形で、長楕円形である

『フジバカマ』キク科の多年草



(フジバカマ)

撮影：2000年11月

『フジバカマ』

薄紫色の筒状花からなる頭花を散房状につける。本州中部から四国、九州、朝鮮半島、中国に分布する。秋の七草として有名で、利尿剤として用いられる。半乾きの状態で、良い匂いを出すため、中国では、これを身につけたり、湯に入れて入浴する習慣があった。このため、香草や蘭草などといわれた。葉は対生し、普通は三深裂花し、光沢がある。地下に横走する根茎がある。高さは1mくらい

『シャコサボテン』 サボテン科 ブラジル原産



(シャコサボテン)

撮影：2001年1月

『シャコサボテン』

平たい茎が多数の節で連なって垂れ下がる（原産地では、幹に着生して枝を分かち、大きな房になって垂れ下がる。）。茎節は緑色で倒卵形ないし長楕円形、先が切形で長さ3cm、幅1.5cmほど。縁に粗い1～3歯があり、葉のへこみに短い2～3本のとげがある。12月から1月にかけて、若い茎節の先に1～2個の長さ8cm くらいの花が咲く。明治の初めに日本に渡来し、観賞用として、温室のなかで鉢植により、広く栽培されている。茎節の形から、クラブ、カクタスと呼ばれ、クリスマス頃に、花が咲くことから、クリスマスカクタスの英名もある。シャコサボテンとカニサボテンは、両種の雑種および園芸品種がたくさんあり、区別が難しい

『スイセン』ヒガンバナ科の球根性草花



(スイセン)

撮影：2001年3月

『スイセン』

中部ヨーロッパ、地中海沿岸から中国、日本に25～35種くらい発見されている。和名は、漢名の水仙に基づく。葉は、線形扁平で3～5枚、その中心から花茎を生じ、先端に単生または散形状に着く。スイセンは、ギリシャ時代に、テオフラストスなどによって述べられているが、これは、今日のフサザキスイセン（エダサキスイセンともいう。Narcissus tazetta）のことである。（日本で、スイセンと呼ばれているのは、このフサザキスイセンの変種。）スイセンは、文学に現れた花の中で、最も古いものの1つ。ギリシャの伝説でも、春とともに生命が蘇る宗教的な象徴として描かれている。

《Narcissus》

ギリシャ神話『ナーシサス』水に映った自分の美しい姿に恋し、それに触れようとして溺れ死に、その後スイセンになったという美青年

『クサボケ』バラ科



(クサボケ)

撮影2001年3月

『クサボケ』

本州以西の丘や山地に見られる。早春にボケに似た朱紅色の花を開く小低木。小枝はとげ状になり、花は5弁、径は2～2.5cmで、葉とともに開き、ごく短い柄をつける。雌雄両性の花がある。果実は、径約3cmで、黄熟する。酸味があるが食べられるので、地梨(じなし)ともいう。シドミ、コボケ、ノボケの名もある。

『ムスカリ』ユリ科の球根植物



(ムスカリ)

撮影2001年4月

『ムスカリ』

ムスカリ属の植物は、地中海沿岸地方から西南アジアにかけて約40種が分布している。この属名のムスカリは、ギリシャ語の「麝香(じゃこう)」の意味で、この仲間には強い芳香を持つ種があることから、このように名付けられた。幅の狭い葉を根出し、花茎を直立に伸ばした頂に、青紫・白・黄緑・稀に黄色の花を、密な総状に付ける。秋に備えて、春に開花する。子球・種子(秋まき)で増やし、種子からは3~4年で開花する。

『みやまきりしま(クルメツツジ)』 ツツジ科の常緑低木



(みやまきりしま)

撮影2001年4月

『みやまきりしま(クルメツツジ)』

高さ1m内外、枝はよく茂り、褐色の剛毛がある。葉は長さ3cm以下の長楕円形で、脈上に褐色の剛毛が多い。5月頃、枝端に2～3個の花を開く。ガク片は短く、花冠は漏斗(じょうご)状で、普通は紅紫色。径は2～3cmで平に開く。九州の山地、特に霧島山・阿蘇山・雲仙岳などに多く自生し、樹相や花色に、いろいろな変化が見られる。園芸品として有名なクルメツツジは、みやまきりしまから変化したものと考えられている

『クンシラン』ヒガンバナ科 南アフリカ喜望峰の原産



(クンシラン)

撮影2001年5月

『クンシラン』

日本には、明治初年に渡来し、学名『尊い』という意味から和名がつけられた。葉は、アマリリスに似て、幅は2.5～4cm位で、先は丸い。夏季、葉間から40cm前後の花茎が出て、頂端に40～60個の花を散状につける。花は、少し下垂し、狭い漏斗形で、小柄があり、長さ3～4cm。6個の朱紅色の花被片は、先が緑色を帯びる。なお、現今『クンシラン』の名で、多く栽培されているのは、上述のものと似た、南アフリカ原産の別種ミニアタC(miniatac)で、花は比較的よく開き、下垂せず、いっそう美しい。

『しゃくなげ』深山に自生するツツジ科の常緑低木



(しゃくなげ)

撮影2001年5月

『しゃくなげ』

幹は枝が多く、樹皮は灰褐色で光沢があり、下面は茶色の毛が多い。初夏の頃、前年の枝端に、数花を集めて、開く。日本産のしゃくなげ類には、ホソバシャクナゲ（葉が細く、花の色が濃紅色）、ツクシシャクナゲ（花の色が紫紅色）、ホンシャクナゲ（花弁が7つに分かれている）など、本種に似た数種がある。また、高山に生息するハクサンシャクナゲは、葉が長楕円形で薄く、花は、シャクナゲより小形で、白色あるいは薄黄色で、淡緑色の斑がある。このうち、八重咲のものをネモトシャクナゲといい、珍しい。吾妻山のネモトシャクナゲと鎌掛谷（滋賀県）のホンシャクナゲの群落は、天然記念物として保護されている。

『ニッコウキスゲ』ユリ科



(ニッコウキスゲ)

撮影 2001年6月

『ニッコウキスゲ』

別名デンテイカ。本州中部以北の高地の草原に群生し、オレンジのユリに似た花をつける多年草。葉は細長く線形で根生し、長さ30～50cm、幅2cmくらい。7月頃に葉心から葉をつけない花茎が出て、先に数花を短穂状につける。長さ8～10cmで、午前中に開き、1日でしぼむ。尾瀬沼の湿原地帯の群生は有名

『ブライダルベール』 ツユクサ科



(ブライダルベール)

撮影2001年6月

『ブライダルベール』

別名タヒチアン・ブライダルベール。非耐寒性多年草で、原産地は熱帯アメリカ。容易に挿し木ができ、栽培も簡単である。細い茎に小さな葉と白い小花を多くつけた姿が花嫁のベールを連想させる。茎が四方に伸び、葉の表は暗緑色、裏は暗紫色。先の方が下垂するので吊り鉢に向いている。

『ききょう』キキョウ科の多年草



(ききょう)

撮影2001年8月

『ききょう』

山野に自生するが庭園にも造られる。根は太く、60～100cmにもなる。葉は長卵状披針形で、柄はほとんどなく、互生し、下面は白っぽい。花は夏から秋に青紫色鐘形花を開き、二重になったものや純白のものもある。キキョウは古くから日本で秋の七草の1つとして親しまれてきており、秋の七草の1つで、万葉集に読まれているアサガオはこのキキョウとの説もある。花そのものは寂しげに見えるところから、単独で模様として用いられるより、紋所として使われることが多かった。種類は100種以上で、この紋を代表する家は土岐氏の一族。戦国時代に加藤清正、明智光秀がこれを用いたことは有名である

『おしろいばな』 オシロイバナ科 南アメリカ原産の多年草



(おしろいばな)

撮影2001年8月

『おしろいばな』

種子の胚乳を子供が<おしろい>と呼んで遊ぶことから、名付けられる。普通は一年草として栽培されるが、暖地は野生状態となっている。根は塊根状で黒い。茎は緑色で、節が高く、盛んに分岐して横に広がり、高さは1m位になる。対生し、卵形で先がとがり、長さは5～10cm。斑入りの品種もある。夏から秋にかけて白・赤・黄や絞りの花が枝端に集まり、夕方開いて、翌朝しぼむ。5本の雄しべと1本の雌しべが花外にとび出ている。果実は丸く表面にしわがあり、黒色に熟して落ち、翌年に芽を出す

『ホトトギス』ユリ科の多年草



(ホトトギス)

撮影2001年10月

『ホトトギス』

本州、四国、九州の山地の林間に生えて、少し毛がある。茎の高さは40～80cmで、ほとんど分岐しない。葉は狭長楕円形で、長さ8～15cm。先が尖り、基部は茎をいдаく。花は、秋に茎の上の方の葉腋(ようえき)に2～3個ずつ付いて、上向きに咲く。径は2.5～3cmで、短い柄がある。和名の「ほととぎす」は花被片の斑点が鳥のホトトギスの胸班に似ていることによる。類品種にキバナホトトギス、チャボホトトギス、タマガワホトトギス、ヤマホトトギスなどがある。

『キバナコスモス』メキシコ原産



(キバナコスモス)

撮影2001年10月

『キバナコスモス』

普通のコスモスとは別の種で、葉の裂片が広く、舌状花が黄色あるいはオレンジ色となる。普通のコスモスと同じメキシコ原産で、19世紀末にアメリカ合衆国に紹介され、日本では1930年代に一般化した

《参考》コスモス(普通のコスモス)

普通のコスモスは、18世紀末頃に同じ産地のダリヤと前後して、スペインのマドリードの植物園長カヴァニレスに送られ、この人物によって「コスモス」と名付けられた。日本には1887年以後に輸入されたとみられており、日露戦争直後に一般化し、栽培されるようになったといわれている。コスモスは、ギリシャ語で「飾り」「美しい」の意

『サルビア』ヨーロッパ原産のシソ科の多年草



(サルビア)

撮影2001年11月

『サルビア』

葉は対生し、長楕円形か披針形。茎の頂には花穂をつける。葉には精油があり、香気が強く、柔らかい。西洋では古代から生や乾かした葉が、家庭薬・料理用の香味料として用いられた。現在もソーセージや特定のチーズに香りを与え、ガン、カモ類、七面鳥、ヒナ鳥の詰め物に使われている。とくにブタ肉とよく調和し、薬用にも用いられる。日本には1879年～1880年頃に渡来したとされる。園芸上「サルビア」と呼ばれているのはサルビア属の中で美しい花を開くものをいい、ヒゴロモサルビア、ベニバナサルビアなどがある。サルビアの語源はラテン語のサルウス（安全・健康）である。薬用のサルビアは、セージのことをさす

『むらさきしきぶ』クマツツラ科の落葉低木



(むらさきしきぶ)

撮影2001年11月

『むらさきしきぶ』

葉は長楕円形で両端がとがり、小さなギザギザと柄があって対生する。初夏に葉腋(ようえき)に集散し、花序に小形の花を開く。果実は小球形で、秋に美しい紫色になる。葉が落ちても残る。「ミ(実)ムラサキ」といい、その果実の美しさを紫式部にたとえて、この和名ができた。北海道南部から九州まで分布する。木部が白色で強く粘りがあるので道具の柄や箸などになる。木炭としても良質のものができる

『クロッカス』アヤメ科の球根植物



(クロッカス)

撮影2002年3月

『クロッカス』

地中海沿岸、ヨーロッパ南部、アジアなどに分布し、75種以上が知られている。葉は線状で、中央に白い線がある。球根から数芽が発生し、各芽の中央から6片の筒状部の長い花が上向きに一花開く。開花期は、秋咲きと春咲きがあり、普通は花壇や植木鉢などに春咲種が作られ、秋咲種は薬用にされることが多い。日本には、明治初めに輸入された。普通は、自然分球したのものから増やされるが、春咲種はよく結実するので、実生もする。球根は、葉が黄変した頃に、掘上げて陰干しする

『水仙』(ラッパスイセン)



(ラッパスイセン)

撮影2002年3月

『水仙』(ラッパスイセン)

『スイセン』(撮影2001年3月)をご覧ください。

『クリスマスローズ』 ヨーロッパ原産のキンボウゲ科の常緑多年草



(クリスマスローズ)

撮影 2002年3月

『クリスマスローズ』

早春に、地上15cmばかりの花茎を伸ばし、白または少し紫を帯びた5片花を咲かせる。根茎が太く、繊維状の太い根があり、葉はみな根元から出て厚く、掌状に深く7～9片に裂けている。原産地の暖地では冬季に開花するが、日本では2～3月頃に花が咲く。花茎は高さ15～30cm、花は径5～6cmで花茎に1～2個をつける。5枚のがく片が花弁状をなし、本当の花弁は、花の中央のたくさんの雄しべの周りになる。筒状で緑色を帯び、雄しべよりずっと短い

『かいどう』中国原産のバラ科の落葉低木



(かいどう)

撮影2002年4月

『かいどう』

庭木として植えられる、別名ハナカイドウ。花は、サクラやリンゴに似ているが、それより濃い白色。前年の枝の芽から散形に数個つき、下垂半開し、やや濃い淡紅色で、径は2cm位。花後に径5～8cmの球形の果実を結び、先端にはがくの落ちたあとが残る。葉は、花とともに開き、長楕円形で長さ3～8cm。やや濃緑で細歯がある。若枝と葉柄には少し毛があり、小枝はときにとげ状になる。和名は、漢名(海裳)に基づくが、これは別種のナガサキリンゴのことで、花柄が短く、果実がやや大きく、食用となるのでミカイドウともいう

『はないら』アルゼンチン産のヒガンバナ科の鑑賞植物



(はないら)

撮影2002年4月

『はないら』

ニラやネギなどに似た臭気があり、花茎上に青色を帯びた白色の花を単性するのでこの名がある。葉は、扁平で線形、少し粉白を帯び、幅4～8mmで数個の卵形の鱗茎の先から出る。春に葉間から長さ10～20cmの花茎を出し、上方に1対の膜質の包茎がつく。花は、春に上向きに咲き、径3cm位。片6個は長楕円形に開き、基部1cmは筒形に合着して花筒となる

『ヒラドツツジ』 ツツジ科のツツジ属のヤマツツジ



(ヒラドツツジ)

撮影2002年5月

『ヒラドツツジ』

ヤマツツジ、ミツバツツジ、レンゲツツジの3種を総称してツツジと呼ぶ。最も一般的な自生種で北海道から九州まで分布する。花は、本来赤れんが色であるが、薄いものや濃いものなど変化が多い。また、花には少し香がある。オシベは、5本または10本であるが、5本から10本まで不定のものもある。花柄やがくには腺毛が多く、粘つきが著しい。ツツジのなかで、ヤマツツジの数は最も変化が多く、園芸品種も多数作られている。日本のツツジは世界的にも有名である

『シラン』ラン科



(シラン)

撮影2002年5月

『シラン』

和名の意は(紫ラン)で、やや大形の地上ランの一種。広い葉を有し、紅紫の花を開く。関東以西の日本及び中国に分布し、山地の湿った崖の上などに野生するが、よく栽培もされる多年生草本。地下には1列に並んだ球形で白色の鱗茎がある。葉は数片で、高さ50cmくらいの茎の下半部に着く。葉身は長楕円形で、長さ15~30cm、幅2~5cmに達し、両端が尖り、多くの縦脈がある。花は、3~8個ほどが茎の頂部に総状に並ぶ。根は傷薬用に供することができる。白花を開くものもあり、シロバナシランと呼んで区別する

『ぎぼうし』ユリ科の多年草



(ぎぼうし)

撮影2002年6月

『ぎぼうし』

日本、朝鮮半島、中国に自生し、その数は40種余りある。葉はすべて根生で柄があり、著しい数個の平行脈と多数の細かい横小脈がある。夏季に葉間から花茎が出て、上方に総状に花をつける。花は淡紫または白色で、ややラッパ形をなし、長さ4～10cmくらい。上部は6個の長楕円形の裂片となり、下半部の花筒から6個の雄しべと1個の花柱が外出する。若葉、特に葉柄の部分は「お浸し」として食用する。オオバギボウシ、イワギボウシ、ミズギボウシなどが日本の山野に普通に見られる。また、オハツキギボウシ、スジギボウシ、タマノカンザシ、コバギボウシ、トクダマ、トウギボウシなどは庭園に栽培される

『ストケシヤ』アメリカ原産のキク科の耐寒性の宿根草花



(ストケシヤ)

撮影2002年6月

『ストケシヤ』

ルリギクともいう。冬に地上の葉は枯れるが、春になると長さ10～20cmの広い披針形で、先が尖り、縁が滑らかなとげ状の縁毛を有する葉を群出する。花茎は30～60cmくらいになり、たくさん分岐して頭状に花をつける。花弁は日光の照射によって開き、夕方には内曲し、曇天のときには開かない。開花期は6月～10月で、実生でとるときは宿根のものより丈は低く、開花期も遅れる。原種は青紫色で、特色のある花色を帯びているが、改良されたものには白色、淡紅色、紫黄色などがある。青色または青紫色のものが最も広く栽培されている。ヨーロッパには1766年に輸入されたが、日本へは大正の始めに渡来した。栽培適地は排水の良い砂壤土で、日あたりの良い場所を好む。寒さと乾燥には比較的強い。鉢植えは6～8寸(18～24cm)鉢に植え、生育の状態に応じて2～3年ごとに改植する

『ヘリオプシス』キク科ヘリオプシス属の総称



(ヘリオプシス)

撮影2002年7月

『ヘリオプシス』

別名宿根姫ひまわり。花期は初夏～初秋までとかなり長い。花屋などでは、一般に「姫ひまわり」という呼称で販売されている

『カサブランカ』(オリエンタル系百合)ユリ科ユリ属に属する植物の総称



(カサブランカ)

撮影2002年7月

『カサブランカ』

種類によって形状・色彩などは異なる。多くは白色又は黄色などで柔らかい鱗片が鱗状に重なり、この部分に多量の貯蔵養分としての澱粉粒を含有している。テツボウユリ、カノコユリなどは苦味を有するので食用には成らないが、ヤマユリ、スカシユリ、オニユリなどは独特の味を有するので一部では食用にされる。華麗な花姿と甘い香りで人々を魅了してきたユリは、最近の技術革新により次々と交配種が登場している。オリエンタル系百合は、近年特に人気の高い「カサブランカ」に代表される品種群で、大きな花を咲かせ、強い香りを放つのが特徴である。これは、日本原産のカノコユリ、ヤマユリなどを交配したもので、花は横向きで大輪咲きが多く、香りも良く切り花にしても花持ちが良いのが特徴である。山林の緑に生える性質があり、夏の強い日差し、特に西日を嫌うので、風通しが良く半日陰になる場所で育てると良い。開花は6月中旬～7月下旬で、目を見張るような大きな純白の花と赤いヤク(花粉袋)のコントラスト・香りが魅力である

『ヒヤシンス』ユリカ科



(ヒヤシンス)

撮影2003年4月

『ヒヤシンス』

アジアからギリシャにかけて野生し、今日では広く観賞用に栽培される秋植えの球根。葉は数枚根生し、リボン状で肉が厚い。花茎は葉より高く、太くて丸い。早春に花茎の先端に総状花穂を立て、花は横または下向きに10～20個付き、短い柄がある。長さ2.5cmほどの狭い釣鐘形で、上方は開いて少し反曲している。白、黄色、青、紫、薄紅などがある。花被片は6個で肉質。花壇、鉢植え、水栽培、切り花などに用いられる。田中芳男(日本の植物学の開拓者)によると、1863年にフランスからチューリップとともに伝わってきたのが我が国における最初とされる。明治時代には、「ハヤシンス」または「ヒヤシント」と呼ばれ、「風信子」と書かれたこともあった

『カランサス』ヨーロッパ原産のヒガンバナ科の球根植物



(カランサス)

撮影2003年4月

『カランサス』

「ユキノハナ」「マツユキソウ」「スノードロップ」などの名で栽培され、早春にただ1個の花が下垂して咲く。球茎はスイセンに似ているが、小形で2～3個の線形の葉が付き、中心から20～30cmの花茎が出て、頂端に花を咲かせ、その直下に1個の包葉がある。花は白色で半開し、外花被片3個は大きく、長さ2cmくらい。内花被片3個は小さく直立し、上端が緑色で浅く2裂する。おしべは6個、めしべは1個で、子房は下位。熟して3裂し、種子を散らす。これに似ていて大きく、花茎約4cm、葉も幅広でアジア原産の「ジャイアントスノードロップ」もある

『テンジクアオイ』(ゼラニウム) フウロソウ科の半低木性の園芸植物



(ゼラニウム)

撮影2003年5月

『テンジクアオイ』

テンジクアオイはゼラニウムの名で呼ばれていて、鉢植えにして鑑賞される。ゼラニウムはもともとテンジクアオイ属 *Pelargonium* の古い属名ゲラニウム(*Geranium*)の英語読みから出てきた名。*Geranium* は、現在ではフウロ属の名となっているが、ゼラニウムの名は今でも花屋などで使われている。テンジクアオイ属は世界に230種以上知られていて、主に南アフリカの原産であるが、交配によってできた多数の園芸品種がある。一般に栽培されているのはニシキテンジクアオイで、インクィアンスとモンテンジクアオイ、その他の交配によって生まれたといわれる。葉は普通、真中を残して帯状に斑があり、縁に鈍いきょ歯がある。茎や葉を切ると、香りがする。茎の高さは50cmに達し、木質で、花が大きく5cm以上のものもある。ツタバテンジクアオイはつる性で1m位になり、懸崖仕立てにして鑑賞する。他に、香の良いホソバテンジクアオイ(一名:ニオイゼラニウム)や葉が大きく幅13cm位あるオオバテンジクアオイなどがある

『姫あやめ』アヤメ科 鑑賞用として栽培される多年草



(姫あやめ)

撮影2003年6月

『姫あやめ』

日本の山野に広く自生し、朝鮮半島や東シベリアにも分布する。ハナショウブに似ているが、根際は紅色を帯び、葉は粉白緑色。花は青紫色で、次々に数花を開く。栽培ものは白花や内花被片の大形なクルマアヤメがある。カマヤマショウブもアヤメの変種で、花は濃紫色。堅くてややねじれた葉を採って縄に利用する。アヤメは”文目”の意味で、その葉が並立することによると言われる。昔アヤメといったのは今日のショウブのことである

『ほたるぶくろ』キキョウ科 山野に自生する多年草



(ほたるぶくろ)

撮影2003年6月

『ほたるぶくろ』

地下に短い根茎があり、茎は高さ30～50cmくらい。根出葉は卵形で長い柄があるが、茎葉は無柄または短い柄があり長卵形である。茎や葉には粗毛がある。初夏に茎の上部に花をつける。がくは鐘形で5片に分かれるが、各片の間には上方にそり返る副片がある。花冠は鐘形、白色または淡紫色で内面に紫色の斑点がある。先端は5裂し、中に5本のおしべと1個のめしべがある。北海道から九州、東アジアの温帯に広く分布する。がく裂片の間にそり返る副片のないものがあるが、これはヤマホタルブクロといい、本州の中部地方に点々と自生する

『宝玉』サボテン



(宝玉)

撮影2007年2月

『宝玉』

原産地はアルゼンチン。球形～短円柱形で、直径は5cm、高さは20cm。綾はいぼ状で二重のらせん状にならぶ。放射状のとげは白色で11～25本、中心に3～4本の赤い褐色のとげがあり、うち1本はかぎ状。花は赤色

『じんちょうげ』ジンチョウゲ科の常緑低木



(じゅんちょうげ)

撮影2007年2月

『じんちょうげ』

原産地はアルゼンチン。球形～短円柱形で、直径は5cm、高さは20cm。綾はいぼ状で二重のらせん状にならぶ。放射状のとげは白色で11～25本、中心に3～4本の赤い褐色のとげがあり、うち1本はかぎ状。花は赤色 原産地は中国。和名ジンコウ(沈香)チョウジ(丁子)の香りのあることからきたもので、漢字では沈丁花と書く。香りの良い淡紅紫色の花が咲く。高さは1m程で、枝はやや太く、密に分かれる。革質でなめらかな倒披針形の葉が密に互生する。つぼみは枝の頂に頭状に集まって冬を越し、早春に開花して芳香を放つ。筒状の四弁花状のものはガクで、先端が四裂し、外側は紅紫色で内面は白い。そのため、花が美しいのは二、三分咲きの頃で、満開のときは白っぽく色あせた感じを受ける。雌雄異株で、日本にふつう見られるのは雄株で実を結ばないが、まれに赤い楕円形の液果をつけることもある。葉の縁が淡黄色の縁取りになった斑入りのフクリンジンチョエゲ、花が白いシロバナジンチョウゲ、花の外側の色がうすいウスイロジンチョウゲなどがある。日本に野生するコショウノキとカラスシキミはジンチョウゲに似た常緑の低木である

『シクラメン』 サクラソウ科の多年草



(シクラメン)

撮影 2007年2月

『シクラメン』

和名カガリビバナ。原産地はギリシャ、シリア。シクラメン属の代表種で多肉の塊茎を有する球根植物。球根の表面はコルク質で堅く扇円形である。葉は球根から多汁の葉柄を伸ばし卵形または心臓形となり、表面には銀白色の斑紋があって美しい。葉縁には浅い欠刻状の歯があり、先端は鈍頭または丸い。花は長さ15～20cmくらいの花柄上に着生し、開花すると花筒部は下向きに5弁の裂片が上向きになって特異な花形を現す。原種はその先端がよじれて上向くためにかがり火のように見える。改良品種には種々の花形があるが、一般には長楕円状へら形で秋から冬にわたって開花する。5月～6月の高温期になると生育は衰え、夏は休眠して秋再び活動するが、2～3年までは発育が盛んでその後は不同の生育をすることが多い。耐寒性のあるものは露地の岩組にも栽培される。2年目の球根は8月下旬に肥土に改植する。夏25℃以上の高温、乾燥は生育を不良にする。生育中は希薄な液肥を施す。

『ジャスミン』モクセイ科のオウバイ属に属する植物の総称



(ジャスミン)

撮影2007年5月

『ジャスミン』

熱帯から亜熱帯に200種余りを産し、一般に低木またはつる性の植物。葉は3～7個の小葉からなる複葉で、花冠は高盆状で、下部は細い筒状で、上部は4～9片に分かれる。ジャスミンの花からは香料原料として重要であるジャスミン油が得られる

『チューリップ』ユリ科チューリップ属



(チューリップ)

撮影2008年4月

『チューリップ』

和名は鬱金香(うこんこう)。原産はアナトリア、イランからバミール高原、ヒンドゥー-クシュ山脈、カザフスタンのステップ地帯。生産地はオランダが有名で、日本では、主に新潟県や富山県で栽培されている。外観は花弁の先端が丸いものや尖ったもの、フリル状のものがある。咲き方は一重から八重、すぼまった状態で開花するもの、花弁が外側へ反り返り、全開して開花するものなどがある。花色は赤、黄、オレンジ、白、緑、紫など単色や複数の色のものなど数百種が存在するが、花弁全体が青い品種のものは未だ発表されていない。

『シャガ』アヤメ科の常緑多年生草木



(シャガ)

撮影2008年4月

『シャガ』

直接日光の当たらない湿地に生じ、時に庭に植えられることもある。地中又は地表にやや太く長い枝があり、その先端に数葉を生ずる。葉は2列に並び、剣状で長さ20～30cmくらい、幅2～3cmくらい。先端が尖り、鮮緑色で光沢がある。花は淡青紫色で、大形の総状花序。アイリスに似て、小形で径5～60cmくらい。朝開いて、夕方にしぼむ。花被片は6個で、平開する。外側の3個は倒卵形で、先端がくぼみ、中央に黄色の斑がある。

『白雪草』



(白雪草)

撮影2008年4月

『白雪草』

根茎で、どんどん増える旺盛な多年草。白い4弁と中心の黄色の愕がよく合う可憐な花を咲かせる。茶花として愛用される。

『姫リンゴ』バラ科リンゴ属



(姫リンゴ)

撮影2008年4月

『姫リンゴ』

日本原産で、雌雄同株。花は最初ピンクで、満開になるに従って白くなる。小さな青い実をつけ、秋には赤く色づく。冬の寒さに強く、1年中屋外で管理出来るが、夏の高温多湿を嫌う。病害虫がつきやすい。日当たりと風通しの良い場所を好む。夏の間水分や肥料が不足すると実がつきにくくなる。

『紫花菜』(ムラサキハナナ) アブラナ科オオアラセイトウ属



(紫花菜)

撮影2008年4月

『紫花菜』

別名シヨカツサイ(諸葛菜)。中国原産で、江戸時代に渡来したといわれる。ハナダイコン(花大根)といっても野菜ではなく、花は、径2.5cmくらいの紫色で、形は4弁の十字架。空き地や土手に、一面に敷物のように咲く。時に白く咲く花もある。たいへん丈夫な花で、種から開花し、耐寒性は強く、露地で越冬する。日光と水はけの良い所を好む。